

宅左衛門がこの職を命ぜられたことがある。

カナヤゴテン 金谷御殿 金澤城の西方に接壤する出丸に金谷の地がある。初め金屋町と稱し、民家の在る所であつたが、前田綱紀の寛文の頃に至つて金谷文庫の設置があり、延寶九年三月には書院・亭榭・馬場亦成り、その書院を馬場の書院、亭榭を馬場の亭と呼んだことが見える。次いで享保十九年五月廿六日前田吉徳は金谷御新宅を巡視したこと、同年六月十六日には金谷廣式落成して前田宗辰之に移徙したといふことからいへば、この時更に改築したものと思はれる。後明和六年前田治脩の還俗して越中勝興寺より歸るや亦之を居館とし、寶曆九年二・九御殿の焼失後は前田重教之に居た。明和八年重教致仕し、享和二年三月治脩の隠棲した後に、並びにこゝに在つた。文化五年二・九御殿の焼けた時は前田齊廣之に入り、元治前後前田慶寧の世嗣であつた時もこゝに住し、慶應二年四月前田齊泰致仕して更に居室を營んだが、明治四年九月その東京に移住した後に及んで之を毀つた。今尾山神社の在る所は即ちその遺址である。

カナヤゼンオウ 金谷善應 本姓は中村、諱は文義、初め仁州と號した。天保元年五月金澤に生まれ、七年臨濟宗猷珠寺に入つて僧となつた。時の寺主を節外といひ、大鹽平八郎の門下であつた。已にして善應廣瀬淡窓の名を聞き、往きて學ばんと欲したが、節外はその幼なるを以て許さなかつた。善應乃ち出奔して淡窓の門に入り、從遊數年具に螢雪の苦を重ね、嘉永元年十九歳にして、豊後の養顯寺に至り寺務を見、安政三年正月師節外寂

したるを以て、歸りて猷珠寺に住した。而も貧寺自ら支ふる能はざるを以て、遂に伽藍を廢して傍の小院に退き、兒童を集めて句讀を授け、以て糊口の資に充てた。善應後に建仁寺の輪番に當り、紫衣を勅許せられる筈であつたが、辭して赴かなかつた。明治六年四月寂。年四十四。

カナヤタケヒサ 金谷健尙 通稱與十郎。與左衛門・左近・佐太夫。天明四年養父勝左衛門の遺知二百石を襲ぎ、江戸御作事奉行・内作事奉行を經、文化六年五十石を加へ、次第に昇進して御先手頭兼改作奉行に至り、天保六年九月十六日六十七歳を以て歿した。

カナヤタケヒテ 金谷武英 通稱多門。父は健尙。文政三年學校讀師御雇となり、次いで助教御雇加人に進み、文政七年新番に列して助教加人となり、天保三年前田齊泰の子延之助の御抱守加人に任じ、五年その逝去に依つて御近習番加人に轉じ、七年父の遺知二百五十石を襲ぎ、御近習番本役・頭並御近習御用等になつた。武英に賢良公子夜話・岐蘇紀行等の著がある。

カナヤチヨウ 金屋町 金澤の町名。金谷町とも書き、元は森下町の内であつた爲、森下金屋町とも呼んだらしい。昔は今の尾山神社の地に町家があつて、銀座金屋彦四郎などが居住し、領内の金銀貨幣製造を命ぜられてゐた。金屋町の名は是より起つたが、元和二年十一月の定書に森下町之末金屋町とあつてその以前に今の地に轉じたものである。

カナヤテマル 金谷出丸 ↓カナヤゴテン
カナヤデンチユウニンジヨウキ 金谷殿中

又備記 一册。前田重教の隱棲後、安永九年二月八日金谷御殿に於いて、高田善藏が中村萬右衛門を殺害し、次いで自らを命ぜられた次第を叙してある。

カナヤノイツボンマツ 金屋の一本松 能美郡金屋にある白山社境内の老松で、根部七米五、胸高四米九。地上四米五で三幹に分かれるが、その部分が特に太く、約七米五ある。この松は當村の肝煎一郎右衛門の僕仁右衛門が、故郷から數株の松を齎した中の一で、それは今から二百餘年前のことだと傳へる。

カナヤヒコシロウ 金屋彦四郎 金澤家柄町人の一人。その祖は富樫氏の族額丹後であるといひ、額氏を冒した。彦四郎は元和六年退隱の後丈仁と號した。丈仁諱は懋續、詩を以て大夫奥村庸禮等と交り、金城市人中騒客たる先鞭を着け、元祿十年十二月十三日歿した。その家は初め金谷出丸の地にあつたが、下堤町に轉じ、更に袋町に移つた。

カナヤブンコ 金谷文庫 前田綱紀の創立で、金谷出丸に四庫を建築し、和漢の書籍を納め、書物奉行が裁許した。又南土藏はこの文庫の南にある一の土藏で、古今の珍書を納め、南土藏奉行之を監した。これらの書籍は、明治二年悉く城内本丸附段の土藏へ假に移し、其の後これを取毀つた。遺跡は今尾山神社の西端である。

カナヤマ 金山 鳳至郡柳田の内の小字。
カナヤマカタ 金山方 藩内の鎖業を監督する局で、御算用場内に在つた。
カナヤモン 金谷門 金澤城外金谷出丸南

方の門である。慶長の金澤城古圖には、金谷出丸の地が悉く町地で、其の頃は金谷門の邊が道路であつたといはれる。

カナヤモンゼン 金谷門前 金谷御殿の南方表門は、堂形御厩門と相對してゐた。その兩門前の廣場を、金谷御門前とも御厩御門前ともいうた。こゝに在つた巨松を大槻屋敷前の古木だといつてゐたが、廢藩の際伐採した。

カナヤヨウスケ 金屋用助 ↓ゴトウヨウスケ 後藤用助。
カニイケ 蟹池 鳳至郡五十里に在る。能登誌に、『五十里村に町野川の淵跡として、今蟹池と呼ぶ池あり。昔蟹山といふに大き成蟹住て人を取しを、弘法大師法力を以て退散せしに、其靈此地に大石と成、色々怪異をなす故に池を埋むとなり。今も此池を穿て石を顯すと、必強雨して百日も不止といへり。是は金藏村境にあるなり。』とある。

カニウラ 蟹浦 珠洲郡の舊邑名。應安五年五月二十三日の文書に正院郷之内蟹浦とあるが、この地名は今存せぬ。能登志徴に今の川浦のことで、カニウラを後世カハウラと誤つたものであらうと記する。

カニサイゾウ 可兒才藏 美濃國可兒郡の産。年十二にして利家に尾張荒子に仕へ、その後常に御馬廻組に班した。末森の役才藏亦軍に従ひ、奥村榮明が佐々成政の土佐々勝五郎と戦ふを見て之を助け、榮明をして敵を倒さしめた。後才藏は前田氏の麾下を脱して豊臣秀吉に従ひ、更に安藝に入つて福島正則の臣となつた。關原役の時、才藏は正則から誓居を命ぜられて居たが、私かに軍に従ひ、首級を得ること前後凡べて十七。皆その指物と

カナ—カニ